～作品タイトル～

『社長の椅子』

～元にした作品のタイトル～

『形』菊池寛

～著者名～

太田　純平

～あらすじ～

清掃員の生井が地下でトイレ掃除をしていると、先輩から上層階の社長室に行けと命じられる。なんでも社長がコーヒーをこぼしてしまったらしい。生井が今まで入ったことのない社長室に入ると、社長が座っていると思われる立派な椅子が目についた。生井はつい社長の椅子の座り心地を確かめるが――。

～特記事項～

地下で掃除をしている清掃員の主人公が、ビルの上層階である社長室へ行き、社長の椅子に座る。菊池寛の「形」における“形に惑わされる人間”というテーマを含みながら、底辺の人間をコミカルに描きたく、こういう物語に仕上げました。

～本編文字数～

４９６５文字

高層ビルの地下駐車場にある男子トイレの個室。その長方形の狭い床面に膝をつきながら、清掃員の生井はウォシュレットのノズルが出てくるところの裏側を念入りにこすっていた。制服の青いポロシャツの襟は立てたほうがいいといつも西澤先輩に言われるがやっぱり立てたくない。人と会話をするのが苦手という理由だけでこの仕事を始めて早４年。昼食代を総額 200 円以内に収めつつ、いかにパンだのおにぎりだの変化を加えるか。それが唯一の楽しみといっていい生井幹男のルーティーンにおいて、いつもと違っていたのは、このタイミングで社用の携帯電話が鳴ったことだった。生井ははめていたゴム手袋を床に放ると、湿り気を帯びた手で着信に応じた。

「お疲れ様です、生井です」

「生井ちゃんお疲れ、西澤です。生井ちゃんさ、今どこ？」

「今ですか？　今は地下ですけど――」

「あーそう、ちょうどよかった。いや今ね、なんか秘書課から連絡が入ったんだけど、なんでも社長が部屋でコーヒーをこぼしちゃったらしいんだ。でね、それを俺らに掃除してほしいんだって」

重要な書類や高価な調度品がある社長室の清掃は、我々のような外部業者ではなく秘書課が直接おこなう。そういう契約でありルールなのだが、なんでも大事な打ち合わせを控えていた社長のズボンや資料にまでコーヒーがかかってしまったらしく、その後始末で秘書課はてんてこ舞いらしい。ましてや今は昼時だ。休憩に出ている者もいて人手が足りないという。規則のことは分かっているが、簡易清掃だけでもいいからお願い出来ないか。そんな依頼だという。

「それじゃ生井ちゃん、よろしく～」

こちらの返事も聞かずに電話が切れた。社長室はビルの 33 階にある。地下にいる自分に対して“ちょうどよかった”とはどういう了見だろう。生井は携帯電話をしまうと、地面から生乾きの臭いのするゴム手袋を拾い上げた。その動作にセンサーが反応して大便器の水が流れる。その一瞬だけ渦潮のように激しく流れたかと思うとまた静かな水溜まりへと戻っていく様を見つめながら、生井は負の感情を自分の中で押し殺した。

ガラスの壁面の外には絶景が広がり、カーペット素材の床面に太陽の光が斜めから射している。木目調の調度品によって遮られたその光さえ幾何学模様の芸術のようである。

生井は社長室の雰囲気に飲まれながらデスクに近づいていくと、全てが一流であったはずの空間に水やりでもしたようなコーヒーの染みがあった。まずは拭き掃除だと床面に四つん這いになって、乾いたタオルでコーヒーの染みから水分を奪おうとする。社長の椅子が邪魔なのでどけようとすると、ローラーが付いているとはいえ重量のある椅子で容易には動かなかった。壁に飾られた写真からも分かる通り社長の“森”は大柄である。あの体型にしてこの椅子ありというわけだ。

生井は立ち上がって社長の椅子を動かすと、高級感のある茶色い肉厚クッションの放つ妙な包容力に気持ちが揺らいだ。まるで座ってくださいと手招きしているようである。

逡巡する生井の背中を最終的に押したものは、非日常に対する飢えだった。生井が恐る恐る社長の椅子に腰を落とすと、バフッと人間を包み込むような重厚な音が鳴った。すぐに立ち上がろうとしたが、臀部を出迎えた柔らかい生地がそれを許さなかった。首、肩、腰、それらの全てのこわばりを分散させる弾力性。流線型に身を任せ一流のくつろぎを肌で感じとることが出来るリクライニング機能。生井は背もたれを 120 度ほど倒すと、これが昇り詰めた者の特権かと恍惚の表情を浮かべた。

するとちょうど目線の高さ――傍らのサイドテーブルに立派なウイスキーのボトルが置いてあるのが目についた。どうやら封は切られているようだ。今まで我慢してきたエネルギーが内なる悪魔となって耳元で囁く。

“今がチャンスだ”

生井はごくりと唾を飲み込んだ。椅子に座った時から理性の防波堤が決壊してしまった生井にとって、目の前の高級ウイスキーは獣に放った骨付き肉と同じだった。

生井は社長の椅子に座ったままウイスキーのボトルを手に持つと、口をつけないように空中からひと思いに液体を垂れ流した。舌で味わう余裕もなく喉に吸い込まれていく激流は、ゴージャスな味わいのプレミアムバーボンであった。生井はナッツの乗ったバニラアイスを食べているかのような芳醇な風味に身体がとろけた。

“もう一杯飲みたい。もう一杯だけ――”

　この、もう一杯だけという渇望が、後の初動が遅れることになった最大の原因であった。

　生井が再びボトルを傾けて喉を潤すと、「失礼します！」と誰かがノックと同時に部屋に入って来た。ウイスキーを吹き出しそうになった生井は何も出来ず、ただあたふたしているだけであった。

「柳井工業の柳井でございます！」

　男が名乗る。生井は自分の部屋にノックもせず母親が入って来た時のように、何をどうするべきか一瞬の間に決めなければならなかった。今の彼にとっての優先事項は“ウイスキーを隠すこと”だ。

　生井は椅子に座ったままウイスキーのボトルを元の位置に戻した。その時、椅子がクイっと動いた。部屋に入って来た柳井から見れば、ちょうど大きな背もたれが死角になっていて誰が座っているのかまでは判別できなかったが、人の気配だけは感じることが出来た。

「社長！　無理を承知でお願いにあがりました！」

　椅子に座っているのは社長だと思い込んでいる柳井は、デスクの前に向かうというより倒れ込むようにいきなり地面に頭をこすりつけた。生井はよっぽど自分は清掃員であると名乗り出ようと思ったが、悪い想像ばかりが働いて動くことが出来なかった。

「社長！　確かにウチは、大手さんのような大量生産は出来ません。しかし、我々には手作りならではの個性と技術力が――」

　悲壮な声で柳井がなにやら訴えを続ける。彼はどうやら零細企業のトップのようだ。生井は男に背を向けたまま一言も発しなかった。永久ほど長く感じた時間であったが、実際は１、２分のことである。そしてついに生井に試練が訪れた。

「社長！　ウチとの契約打ち切りの件、今一度お考え直しを！」

　そこで柳井はようやく泣きはらした顔を上げた。生井は男が顔を上げたのを声の具合から感じ取った。

「社長のお考えを……お聞かせください……」

　重苦しい口調で柳井が言った。男の問いに対して何かを答えなくてはならない。

　するとその時、幸か不幸か社用の携帯電話が鳴った。きっと西澤先輩だ。進捗状況が聞きたいのだろう。生井は慌てて着信を切った。高齢の社長にしてはポップな着信音だなと男は思ったに違いない。
　生井はもう電話してくるなと祈るような気持ちで携帯電話を握りしめていると、ふとアイデアの稲妻が身体を貫いた。生井は急いで携帯電話に文字を打ち込むと、椅子の側面からゆっくりと画面を男に提示した。
“今すぐ帰って社員に伝えるといい。契約続行だと”
　生井が携帯電話のメモ帳機能に咄嗟に打ち込んだ文字。柳井はその色よい返事に瞳を潤ませた。
「しゃ、社長！　そ、それは、ほ、本当ですか！？」
　生井は早く出て行けという本音を強調するように再び携帯電話の画面を男に示した。その激しさに椅子の背もたれまで微かに揺れる。
「あ、ありがとうございます！　本当に！　ありがとうございます！」
　柳井は最後までぺこぺこしながら部屋を後にした。生井は安堵のあまり深い溜息を吐くと、柳井が出て行った扉に張りついて様子を窺った。掃除は終わったことにして、一刻も早くここから逃げ出さなくてはならない。
　そんな生井の耳に廊下から声が届いた。
「おや？　柳井さん？」
「おぉ！　長谷川部長！」
「社長にご用ですか？」
「えぇ、つい先ほどまで！　社長なら今お部屋にいらっしゃいますよ」
　その声を聞くや否や生井は慌ててデスクへ戻った。逃げる間もなく扉がノックされ男が入って来る。
「失礼いたします。開発部部長の長谷川でございます」
　生井は条件反射的に社長の椅子に身を隠した。別に社内の人間であれば清掃員の自分が見つかってもいいのだが、なにせウイスキーを飲んでしまったという引け目がある。それにさっきの男が“社長は部屋に”と余計なことを言ってしまった。
「社長……例の、再開発の件ですが、やはり、地元住民の反対が根強く――」
　長谷川と名乗る中年男の声。まるで失敗を咎められることを恐れているようであ

る。生井は男の視線から自分の身体が見えないように椅子の角度を微調整した。その揺れる椅子の具合が長谷川には恐ろしくてたまらなかった。
「も、もちろん、住民の要求を呑まなければ、大幅な収益が見込めることは、確かなのですが――」
　生井はこの男にも例の携帯電話の作戦を使った。“今日は下がれ”と文字に打ち込み、椅子の側面から男に示した。ところが長谷川は激怒されるのを恐れるあまり、頭を 60 度の角度で下げたまま弁明を続け、こちらを見ていなかった。
　生井は携帯電話を下げると椅子の裏で頭を抱えた。またいずれこちらがしゃべらなくてはならない状況に追い込まれるだろう。いくらなんでも社内の人間を社長の声真似で誤魔化すことは出来ない。
　いや、待てよ。生井の脳裏に閃光が走った。今この長谷川という男はこちらを見ていない。ということは、多少椅子からはみ出たところで、この男の目には――。
　生井は素早くデスクの上にあったメモ用紙と万年筆を取った。そして社長の――というより高齢者特有の達筆さをイメージしながら文字を書いて男に示した。それでも男が見ないので、生井は紙を強調するようにペラペラと音を立てた。その音にようやく長谷川が頭を上げる。
「はっ、え？」
　あまりにもシンプルな 2 文字に長谷川は目を見開いた。
「ちゅ、中止、でございますか？」
　生井が書いた文字は“中止”の 2 文字だった。
「いや、しかし、再開発の中止となりますと、これまでかけた莫大なコストが――」
　つべこべ言うなと生井が紙を激しく揺らす。椅子の背もたれも怒っているかのように揺れる。これには元から社長を恐れていた長谷川はヒィと思わず声を上げた。
「で、では、開発を中止するよう、た、ただちに――」
　長谷川は頭を下げると、そそくさと部屋から出て行った。生井は提示していた紙をくしゃくしゃに丸めてポケットにしまうと、再び扉の前に行って、長谷川の気配が消えるのを待ち侘びた。
　さぁいよいよ自分も脱出だ、という算段になったその時、デスクに置かれた固定電話が鳴った。外線ではなく内線の音だ。廊下にまで響いているであろうその大き

な音は、出ないとかえって周囲に不審を招く。３コール目が終わったところでそう判断した生井は、ようやく電話の受話器を取った。
「直接のご連絡申し訳ございません。受付の米本でございます。秘書課の方がお出にならなかったので直接ご連絡いたしました。市長の蓮池様がお見えです」
　生井は答えに窮し、“ン”と咳払いのような重い声を出して、電話を切った。生井は市長とやらが来る前に部屋を出ようと考えたが、時すでに遅し。外からエレベーターが着床する音が聞こえ、廊下から複数の革靴の音がこちらに近づいて来た。生井はかえって電話に出たという事実が裏目になってしまったことを後悔しつつ、結局、社長の椅子に隠れざるを得なくなってしまった。
　扉がノックされ複数の足音が中に入って来る。
「いやぁ失礼します」
　しわがれた声だ。だいぶご年配とみえる。
「いやぁ社長！　わたくし不肖、蓮池！　このたび国政に打って出る決意をいたしました！　まずは社長にご挨拶をと思いまして――」
　市長の蓮池とその側近が２人。生井の座る社長の椅子の前に立つと、ちょうどその時、ももひき姿のみすぼらしい老人と、中年の女が一人、部屋に入って来た。社長の森秀彦と秘書の佐々木である。
　蓮池ら三人は、場違いな格好をした老人の闖入に唖然とした。室内に客人がいて驚いているのは森と佐々木も同様である。
　先に口を開いたのは市長の蓮池であった。あんぐりと開けた口を戻すと、入って来た老人に向かって蓮池が訊いた。
「どちらさま？」